

令和6年度 第2回滋賀県多文化共生推進プラン検討懇話会 議事概要

日 時：令和6年8月29日（木）10：00～12：00

場 所：滋賀県庁 危機管理センター 会議室2

出席委員：李委員、大河原委員、木村委員、竹屋委員、中江委員、西川委員、
古谷委員、森委員、山中委員、脇田委員

オブザーバー：2名

取 材：2名

1 主な意見

【用語について】

<外国人県民等>

- ・ 基本目標では、「国籍や民族などの違いにかかわらず」「滋賀県で暮らし、働き、学ぶすべての人」を対象としているが、本文は外国人と日本人とを分けて記載している部分が多い。
- ・ 外国にルーツを持つ日本国籍の人も含まれるのであれば、そのことも説明すべき。
- ・ 第3章の2、今後の課題の冒頭にある「外国人県民等は、少数派で支援を必要としている存在」「外国人県民等の存在感は高まっていきます」という言い回しが行政側の目線から書かれたように感じる。

<支援>

- ・ 行動目標などに用いられている「支援」という言葉は、支援する側とされる側を想起させる。外国人は支援すべきものという前提から書かれているのではないか。

<外国人材>

- ・ 外国人材という言葉は、人を物として扱う印象を受ける。

【プラン周知について】

- ・ このプランは県民に浸透していないように感じる。プランをどう運用するかも重要。例えば、条例化して企業活動に対して効力を発揮させるのも一つ。
- ・ 外国人に伝えるためには、簡易版の作成が必要。メリットが伝わる内容がよい。
- ・ このプランはすべての人に浸透させるものというよりは、行政が必要な施策をしていくときに役立つという側面がある。
- ・ プランは一つの手段、一人ひとりの県民が顔の見える関係を増やしていくのが大事。
- ・ 多文化共生は楽しいものだと思うプランとするため、キャッチフレーズやスローガン、サブタイトルがあってもよい。
- ・ 小学校で多文化共生をテーマにした絵や標語を募集するのはどうか。

【多文化共生意識の高揚について】

- ・ 子どもの頃から外国人と意識せずに接し、それが当たり前となる世界が多文化共生。
- ・ 多文化共生の考えを無意識に身につけるためには、幼少期からの取組が必要。
- ・ 母語を尊重することは、その人の自尊感情を高めることにもつながることを、教諭や支援者に伝えたい。

【その他】

- ・ プラン冒頭に多文化共生の説明や基本目標があると、初めて見る人にも分かりやすい。
- ・ 外国人にもアンケートを取ってほしい。
- ・ ヘイトスピーチ解消法にも触れるべき。
- ・ 年号表記を併記ではなく、西暦のみにしてはどうか。